様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２２３５

研究課題名（和文）標注を中心とした近世詩論の基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study of o poetry theories in Edo Era

研究代表者
小野　泰央（ONO, YASUO）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：９０２８０３５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：宇都宮遯庵の注釈数は近世漢詩文注釈者の群を抜いている。集部に限っただけでも、対象とした詩文集は多数を挙げることが出来、なかでも『錦繍段』への注釈は頻繁で、唯一の抄物である万治四年の『頭書錦繍段抄』を始め、後には寛文四年の『錦繍段首書』、貞享元年の『錦繍段首書』、元禄十五年の『錦繍段詳註』と三度の標注を製作し、計四度も注を施した。遯庵がその注釈に執拗な改訂を行った『錦繍段』は、自身にとって創作する上でも重要な詩集であった。彼の『遯庵詩集』『遯庵先生文集』における詩文には、『錦繍段』の詩句引用が色濃く見られるのみならず、その換骨奪胎は彼自身の注解内容ともまた合致する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
明清詩論の影響下にあるということで、近世の詩論は、宋代詩論に依拠した五山抄物と一線を画することができる。藤原惺窩は中国明代の文論を編集して『文章達徳要領』を成し、石川丈山は、明代以降の詩文論書に依拠ながら『詩法正義』を成した。丈山は近世において詩人として本格的に活動したと言われる。その丈山の『詩法正義』を受け継いだ詩論書が、貝原益軒『初学詩法』と、遯庵の『文家小筌』（『作文楷梯』）で、分けても、先ず抄物を製作して、その注釈の手法を標注へと移行させた遯庵は、明代標注を近世的な標注に仕立てた張本人でもあった。加えて、遯庵はその標注の意義を、自らの標注を用いて自らの詩で実践した。

研究成果の概要（英文）：The number of annotations in Utsunomiya Tonan is by far the largest group of early modern Chinese poetry commentators.
"KINSYUDAN", which Tonan made relentless revisions to the annotations, was an important poem collection for himself. Not only can the poem citation of "KINSYUDAN" be intensely seen in his poetry, but its metamorphosis also conforms to his own commentary content.

研究分野：日本漢文学

キーワード：近世漢文学　標注　宇都宮遯庵

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近世には、その詩話・随筆に負けないくらいのおびただしい数の標注を始めとする注釈が制作されて、その注釈を含めた上での近世における詩論の解明はいまだされていない。特に標注に関してはその基礎的な作業さえなされていない。僅かに高山節也によって書誌的な研究はされているものの、文学的研究はほぼ皆無である。近世標注は、明らかに中国詩論の影響を受けている。元代詩論はすでに整理され（主に張健『元代詩法校考』<北京大学出版社・2000 年>)、明代詩話についても（『明詩話全編』<鳳凰・2006 年>)、また清代詩話についても（『清詩話』<中華書局・1963 年>)、詩論の総体はすでに把握されている。

２．研究の目的

本研究では、近世における詩論の基礎的研究を行う。近世詩論の全体像を把握した上で、その文学史的な位置づけを行う。本研究の具体的な目的は、まず近世の詩文集注釈、特に標注を中心として調査する。その上で、詩話･随筆も含めて近世詩論を捉え、さらに中国詩論との関係を解明する。つぎに、近世詩論が、近世の他の作品にどのように関わっていくのかを明らかにする。詩文集の標注に限定したのは、例えば、漢詩や俳諧、さらには散文などの近世文学における表現形成と関連すると推測するからである。

３．研究の方法

まず対象作品を網羅する。詩文に関する近世標注を刊本・写本・版本ともに収集する。その上で、近世標注の位置づけを行う。横軸として、近世注釈との詩論の交渉について整理する。そこから中国注釈の説と中世との説を判別する。さらに縦軸として、中世注釈と如何なる関係にあるかを分類する。加えて、そのことが近世の他のジャンルにどのように派生しているのかの調査を行う。

４．研究成果

１、李攀龍・王世貞等の詩に注を施した荻生徂徠（一六六六年～一七二八年）の『絶句解』（享保八年<一七二三年>頃の成稿とされる）は、それまでの漢詩注釈書に比して特異である。字法句法を頻繁に説いているからである。『絶句解』にはまた「読」（読点）「連下読<下に連なりて詠む>」等の注記が付されていることも特徴的である。加えて、読者としての感想なども示されているから、字法句法の注記も含めて、つまりは『絶句解』には読法が多く示されていることになる。同様の読法は徂徠の『古文矩』『文変』『四家雋』のみならず、『訓訳筌蹄』や『論語徴』などの経書の注にも見られるから、それは徂徠が主張した訓読の否定、所謂「崎陽の学」と無関係ではない。徂徠自らその読法は幼少期から行ってい

たとし（『訳筌初編』）、宇佐美灊水は李王詩へ解釈を徂徠の長年の研究の成果であるとするが（「合刻古文矩文変序」）、特に『絶句解』における字法句法に関しては『詩人玉屑』や『聯珠詩格』など五山などでも親しまれてきた詩論と共通する部分がある。ただそれらの詩論は『唐詩訓解』や『唐詩帰』に踏襲されており、両書にはまた「読者・・」とする注記もあるので、むしろ蒋一葵や鍾惺などの明代詩論を直接の典拠と想定することができる。『四家雋』における韓愈と柳宗元の文に関する注なども、明の張鼐の『四家名文雋』（内閣文庫に現存）や『必読古文正宗』に拠っているからである。とすると、『絶句解』は近世註釈のなかでも比較的早く明代詩論を受容したことになる。のみならず、『四傑詩選』（内閣文庫と東洋文庫に現存）における清の孫枝蔚（一六二一年～一六八七年）の注が明記されていることは、清代詩論を最も早く引用した注釈書の一つであるといえる。総じて、徂徠の詩論は、明清詩論における字法句法を色濃く受容している。その明清の字法句法をいち早くしかも過度に受容した徂徠の詩文論は、また字法句法を説くことが一般的となる近世詩論の嚆矢として位置づけられるのである。

２、近世における標注者のなかでも、宇都宮遯庵（寛永十年<一六三三>～宝永六年<一七〇九>）はその数において群を抜いている。特に彼の『錦繍段』への注釈は頻繁であった。唯一の抄物である『頭書錦繍段抄』（万治四年<一六六一>）を始めとして、『錦繍段首書』（寛文四年<一六六四>・貞享元年<一六八四>）、『錦繍段詳註』（元禄十五年<一七〇二>）と、計四度の注を付している。遯庵にとって『錦繍段』はまた、創作する上でも最も重要な詩文集であった。彼の詩には『錦繍段』の詩句引用が色濃く見られるだけでなく、四度の注釈によって培われたと考えられる表現を見出すことができるからである。そもそも『首書錦繍段』『錦繍段詳註』の『錦繍段』本文には、それまでの「錦繍段抄」および遯庵自身の『頭書錦繍段抄』になかった韻字が新たに示されているが、実際に、遯庵の詩には、『錦繍段』の韻字とそれを含めた表現との共通が確認される。遯庵は『錦繍段』の韻とその韻字を含む表現に依拠しながら作詩をしていることになる。遯庵の漢詩には、自身が『錦繍段』注釈の際に固執した解釈に基づいて、用いられている語も存在する。のみならず、遯庵が自らの『錦繍段』注釈に記した原典における注や、その詩に関する詩話を参考にしながら作詩した痕跡をも見出すことができる。自ら『錦繍段』を注解することで、表現の幅を広げていったことは、彼自身の『文家小筌』に「博ク詩集ヲ見テ、古人ノ詩ヲ記シ、詩話ヲ読テ、句ヲ作ルノ法ヲ知ラザレバ、其語ヲ立ルコト、鄙俚薄俗ニシテ終ニ佳句ヲ得ルコト無シ」と記したことを、まさに体現したことになる。遯庵がこのように定義した作詩方法は、

注解が盛んになった中世においても自然な行為であった。それは『錦繍段』の編者天隠竜沢と、『錦繍段抄』の作者月舟寿桂にも確認される。こう考えると、中世から近世における注釈と作詩の関係を、今後さらに体系づける必要が生じてくることになる。

３、祇園南海（一六七六年～一七五一年）の詩論において、「影写」という評語がその根幹を成すことは、松下忠氏によって夙に論じられている（『江戸時代の詩風詩論』）。「影写」とは、例えば、明の王越の「辺城春雪」と題する「二月中旬雪尚飛、辺城草木得春遅、不知上苑新桃李、開到東風第幾枝<二月中旬に雪尚ほ飛ぶ、辺城の草木は春を得ること遅し、知らず上苑の新桃李、開きて東風にて第幾くにか枝に到る>」という詩に対して、「三句ニ雪ヲ不レ言、シカモ題ヲ不レ離。是影写ノ手ナリ。凡影写ト云コト古人鏡花水月又ハ風影トモ評シタリ。先影写トハ、物ノ本形ヲウツスヲ云」（『明詩俚評』「影写」王越「辺城春雪」）として、題の景物を直接言わずにその本質を写すことをいう。南海はさらに「影写」を「鏡花」「水月」「風影」と同じであるとし、「委クハ予カ所レ撰鏡花水月集、皆此体ヲ載ス」（同）として、その「鏡花水月」（明清詩論に頻繁に見られる語）という語をそのまま書名にした『鏡花水月集』という詩集を自ら編纂したという。この書は、関儀一郎の『近世漢学者著述目録大成』に南海の著書として挙げられ、植谷元氏の論文「祇南海年譜」（「国華」）では「《著書》」に「鏡花水月集　自筆本　一巻一冊」としているが、『国書総目録』でも国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」でもその所在は記されていない。本書はその存在が和歌山県立博物館寄託の個人蔵二冊に確認される。一冊は帙の題簽に「鏡花水月集　祇園南海先生撰並自筆」として外題に「白玉氏祇園南海阮瑜書」とする（植谷氏論文の「自筆本一巻一冊」はこれを指すか）。もう一冊は帙の題簽に「鏡花水月集　祇園南海先生撰　門人田中峋嶁筆写本」として、外題に「鏡花水月集」とする。前者は唐の七言絶句七八首が（ただしほとんどが『唐詩訓解』「七言絶句」所収詩）、後者は同じく唐の七言絶句一七首、六言絶句八首の、五言絶句八首、計三三首が記される。二冊目帙の「祇園南海先生撰」ということを信じるならば、本書は二冊上下巻で、七言・六言・五言の計一一一首の絶句から成る撰集と言える。南海自身がみな「鏡花水月」体の詩を載せたとするならば、本書は特定の詩体のみを集めたという点で極めて特異な漢詩集と言え、加えてそこに南海が考える「影写」の実際を把握することができる。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3　件）

①小野泰央「荻生徂徠『絶句解』における読法」（第 34 回和漢比較文学会大会・2015 年・

於関西大学）

②<u>小野泰央</u>「宇都宮遯庵の詩文と『錦繍段』注釈」（第 36 回和漢比較文学会大会・2017 年・於大手前大学

③<u>小野泰央</u>「祇園南海編『鏡花水月集』について」（第 37 回大会和漢比較文学会大会・2018 年・於帝塚山学院大学）

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。